上野の東京美術學校では、この二十一日から三月十五日まで入學願書を受付けるが、今年から入學試驗科目にかなりの變改が加へられた、先づ建築科、圖案科には實技の外に歴史、用器畫、數學、國語等を何れも中等學校卒業程度で課する外

特に日本畫科に於て從來毛筆のみに限られてゐた寫生試驗を、新に「鉛筆淡彩畫」でもよいと附け足して面目を新にした、これは中々の大英斷でかうすることによつて次の様な便宜が得られるのである、即ち

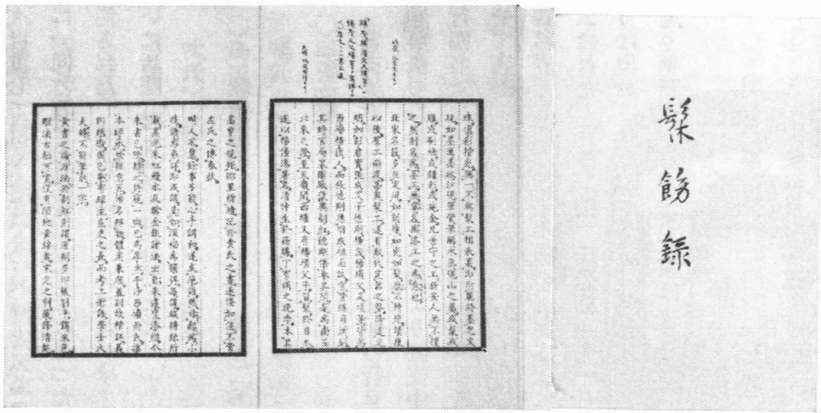
現在の中等學校の圖畫教育では一切毛筆を使用しないことになつてゐるので、美術家志望の青年は受驗の前に少くも一二年は專門の毛筆畫家に師事して置く必要があつたが、今回の改正で其の要がないのみならず、準備の爲めの毛筆畫風がその師風になづみ作畫上のわざはひとなつたことを全く除去し純な質で大にのびることが出來ると云ふにある。

この報道は、『東京美術学校校友会月報』所載入試問題（333頁参照。なお、この年から入学試験問題が同誌に掲載されるようになった。）によって確かめられる。日本画科の写生の試験において毛筆画あるいは鉛筆着色画の一方を選択することが許されたのは、必然的に毛筆画の衰滅をもたらすものであって、本校草創期の伝統復興路線はさらに一層細々としたものになったと言えよう。

②『髹飾録』の頒布

昭和二年十一月、漆工技法の専門書として貴重な『髹飾録』が体裁を改めて頒布された。頒布の事情については次の広告に詳しく記されている。

明　黄成著
民國　朱啓鈐氏刊本縮撮　髹飾録（二卷）一册



『髹　飾　録』

髹飾録は明の黄成の著す所にして支那に於ても唯一の漆工技法專門書なり。然るに此書の流布廣からざりしにや支那にても久しく軼書と爲り居り殆んど知るものなきに至れり。我邦にては僅に寫本にて傳はりしが其寫本すら天下數本に過ぎず。吾校には一部を存せり、曩に大村西崖先生の東洋美術史を著述されたる中に髹飾録が漆工家の珍籍たることを稱せられしを以て支那民國の朱啓鈐氏の知る所と爲り、遂に同氏の手に依り卷頭に詳細な

る辯言數則を增補し、莊雅なる一册本として新に刊行されたり。今朱氏刊本に據り之に訓點を施こし原本のまゝ縮撮し以て同好に頒たんとす。漆工家は勿論一般の工藝家、美術史家は必ず寓目さるべき稀世の珍籍なり。

此の本の實費刊行の企があつて右の廣告文を受けた編輯子はいろ〳〵相談の結果月報購讀者には月報附錄として差上げる事に致しました。

但し上製（和紙に刷つたもの）を望まれる方は實費金五拾錢也を添えて田邊孝次氏へお申込を願ひます。

（『東京美術学校校友会月報』第二十六巻第五号）

③ 大村西崖の死去

教授大村西崖は晩年に至ってなお一層研究、著述、講演、文人画の制作等に精力を注いでいたが、大正十五年春から体調を崩した。同年五月に第五回目の支那旅行を試みて呉県角直鎮の保聖寺に赴き、楊惠之作と伝えられる塑像羅漢を調査。これを『塑壁残影』として出版し、十二月には自作文人画展を開いて作品集『胷中邱壑』を出版したが、翌昭和二年一月喀血し、三月七日（公式文書には全て八日と記されている。）に肺癌のため急逝した。告別式は十一日に牛込区矢来町三番地の自宅で行われ、十三日に郷里静岡県岩淵で本葬が挙行され、同地光栄寺に埋葬された。

西崖の業績については本書で既に再三触れたが、なお参考のために正木の追悼談話を左に転載する。

大村西崖氏の死を悼む　　正木直彦

大村氏は美術學校第一回の卒業生で明治廿六年に卒業された。その時の卒業生は日本畫に横山大觀彫刻に大村西崖、白井雨山氏が居た。横山、大村の兩君は學校を卒業するとすぐ京都の美術學校に教師となつて行つた。其後東京に歸り永く美術學校の教師となつて居たのである。

大村君はモト〳〵彫刻の出だけど、それでなく美術の歴史を教育した。それに彫刻の出身でありながら、入學前から繪畫の方をやつてゐたし學校の方針もやはりさうであつたので、繪畫の方にも隨分精通してゐられた。美術の歴史の研究を進めて行くと、どうしても支那の事や、佛教を研究せねばならぬ。それで大村君は盛に佛教の一切經を繰り返し〳〵讀んだ。亦漢籍をも片端から讀破したのである。その精力は非常なものであつた。その讀書の方法が非常に早くて要領を得てゐた。それが皆後に役立つて行くのであつた。審美書院から出てゐるたくさんの美術書は大村君の手を經てゐないものはないであらう。「東洋美術大觀」は日本で出來た美術書の中で最も廣汎のもので、其の材料の蒐集から説明はこと〴〵く氏がやつたものである。

氏の著述には「日本繪畫史」「支那繪畫史」「支那〔美術史〕彫塑編」などある　この「支那彫塑編」は氏の著述中でも最も努力を拂つてゐる非常に價値のあるものである。氏は亦佛教を研究し出してから密佛を研究し「密教發達史〔志〕」を漢文で書いてゐる。これは五册のもので、漢文であるから支那の僧侶や西洋の佛教研究者などにも廣く讀まれてゐる　これは遂に日本學界の評判とな